

---

# 風子アフター

ゲキガンガー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風子アフター

### 【Nコード】

N7845M

### 【作者名】

ゲキガンガー

### 【あらすじ】

風子のアフターストーリーです。

「もし、よろしかったら、風子と付き合ってください」

木製のヒトデを持った少女は、俺にヒトデを渡し、そう告白した。少女と俺は、初対面のはずだった。

だけど、俺はその少女のことを誰よりも知っていた。だから、俺達は付き合うことになった。

「岡崎、飯喰いに行こうぜ」

昼休みになつてすぐ、春原はそう誘ってきた。

「悪いな、春原。一人で喰ってくれ」

「なんでそうなるんだよ？」

「彼女と一緒に喰うんだよ」

俺は春原に告げて、席を立った。

「岡崎、僕達の友情を忘れたのか」

大げさな口調で、春原が引き止める。

抱きついて、離れない。

「どけ、春原」

「嫌だ。岡崎、いつからお前はそういう方面に興味を持ち出したんだ。昔のお前は、いつも僕だけを見ていてくれたじゃないか」

「誤解されるよなことというな。いいから放せ」

強引に引き離し、俺は教室を出た。

「岡崎」

春原が泣きながら引き止めたが、俺は無視した。

工作室。美術部が使うような、教室だ。

普段は使う人がいなく、昼休みでも、それは同じだった。

「岡崎さん。遅刻です」

ぶつすとした顔で風子はいった。

まあ、だか、そこにも愛着があるような可愛らしい顔といえる。

「悪かったな。とんだ邪魔が入った」

俺達は席に座った。

「今日は、風子がお弁当を作ってきました。岡崎さんの分も、ちゃんとあります」

風子は机の上に、変わった弁当箱を広げた。

四角くもないし、丸くもない。強いて言えば、星形の弁当箱。

「ちなみに、この弁当箱はなんだ？」

「ヒトデ形の弁当箱です。とても可愛かったので、買ってきました」

変わった形の弁当箱もあるものだな。

胸中で呟き、弁当箱のフタを開ける。

中は、まあ、よくも器用にやったものだ。

「これは、なんだ？」

俺はウインナーを橋で摘み、尋ねた。

「ヒトデ形ウインナーです」

「これは？」

「ヒトデ形たまご焼きです」

「ちなみに、これは？」

「ヒトデ形のリングです」

弁当の中身も、ヒトデ尽くし。

流石に、本物のヒトデは入っていないようだ。

なんというか、ヒトデに対しての愛は感じるな。

俺達は、これから毎日続くであろう、昼食を始めた。

「……………友達は出来たのか？」

俺は、風子にそう尋ねた。

風子は、事故で長い間入院していた。

最近、復学してきたばかりだ。

クラスでも、多少浮いた存在だろう。

俺以外の奴と一緒にいる所は、見当たらなかった。

「う……………出来ていないといえば、出来ていないのかもしれない」

「まあ、焦ることもないけどな。古河なんてどうだ。あいつもお前と似たような立場だし」

「ふふん。やっぱりここにいたか」

突然の声と共に、春原が入ってきた。肩で息をしている。恐らく、校舎内を探し回ってきたのだろう。

「何しに来た。春原」

「いやー、岡崎と付き合う変わった奴を見たくてね。それで、どこ？」

春原は視界を見回す。見当たらないようだ。

「なんだよ、岡崎一人きりじゃないか。はーん、さては見栄を張りたくて僕に嘘を吐いたな」

（なんですか、岡崎さん。この失礼な人は）

風子が耳打ちする。

（気にするな。ただの馬鹿だ）

「なに独り言いつてんだよ。岡崎」

「ちゃんという」

俺は、風子を春原の前に押し出した。

「……………誰、この小学生？」

春原は怪訝そうに尋ねた。

「最悪です。風子、流石に小学生に間違えられたことはないです。

この人、さっきからずっと失礼です」

風子は頬を膨らませ、怒りをあらわにしている。そういった態度も子供っぽいのだが。

「もしかして、この子が彼女？」

俺達は答えなかった。春原は沈黙を肯定と受け取ったようだ。

「堕ちたな、岡崎」

春原の声色には軽蔑の意がこもっていた。

「いくら女にモテないからって、こんな小さい子に手を出すなんて」

お前と一緒にするな。

「絶望した。僕は岡崎に絶望した」

春原は身を翻し、教室から出て行った。

なんなんだ、あいつは。

放課後。

俺は、校門で待っていた。

「なにやってんだ、岡崎。寮はそっちじゃないぞ」

春原がそう声をかけた。

「待ち合わせ」

俺は、そっけなく答えた。

「誰と？」

春原の問いに、俺は答えなかった。

しばらくして、風子が来た。ただ、その傍らには、別の女生徒がいた。

古河渚だ。

昼食時、俺が言っていたことを、聞いていたのだろうか。

「岡崎さんに春原さん。こんにちは」

渚は、丁寧にお辞儀をした。

風子は、渚の背中に隠れ、背中越しに、春原を睨んでいる。  
警戒しているようだ。

「まあ……一緒に帰るか」

俺達は、途中までだが、一緒に帰ることにした。

「しかし 岡崎に彼女が出来るなんてねえ」

歩きながら、春原は感慨深げな様子でいった。

「なんか、先を越されちゃった感じだね……」

春原はしばし、考え込むように沈黙し。

隣を歩いている渚を見て、

「ねえ、渚ちゃん。僕たちも付き合っちゃわない？」

軽薄な口調で、そう訊いた。

「こんな失礼な人と、付き合う人はいません」

不愉快そうな口調で、風子はそういった。

「な、なんなんだこの子は。僕のどこがいけないっていうんだ？」

「……少なからず、良い所が見当たりません」

「岡崎、僕の良い所いってやれよ」

春原は肘で肩をつつき、そういつてきた。

俺はしばらく、頭を悩ませ、

「ああ。直立歩行ができること、かな」

「だってさ……わかった？僕の良いところ」

春原はいつて、突如叫んだ。

「普通できますよね!？」

「じゃあ、手で物を掴める」

「いや……掴めるから、普通」

「他は……えっと」

俺はしばらく頭を悩ませる。

その時の沈黙が長かったからか、春原は諦めたように、深い溜息を吐いた。

「ど、どうせ僕は、僕は取り柄のない人間ですよ」

拗ねたように、春原はそういった。

地面を棒でつついて、いじけていたので、俺達は無視して進んでいった。

「ちよっと、待ってよ!」

春原は慌てて俺達を追い始めた。

「私は、ここでお別れです。風ちゃん、岡崎さん。さようなら」  
古河パンの前で、俺達は別れた。

「渚ちゃん家って、パン屋だったんだね」

春原はそういった。

「というか、お前何しに来たんだ。寮はこっちじゃないだろ」

「岡崎はどうするんだよ？」

「これから風子の家に行くんだよ」

「……ちえ、僕は邪魔者か。ねえ、風子ちゃん、僕もいつていい？」

「お断りします」

風子は即答だった。口調には明らかな嫌悪がこめられている。

「わかったよ……帰ればいいんでしょ、帰れば」

春原は踵を返し、歩き出した。

「ああ。春原、言っておくけど」

「なあに？岡崎」

「そこ、マンホール開いてるぞ」

「え？……うああああああ」

落下中の春原の声は、マンホールの中から響いてくる。

大丈夫だろう。春原だし。

「あら。岡崎さん、こんにちは。風子、お帰りなさい」

そういつてきたのは、風子の姉である、公子さんだ。

家の前で、花の水遣りでもやっているのか、その手にはじょうろがあった。

「お姉ちゃん、聞いてください。風子、彼氏が出来たんです」

風子は、嬉々とした様子だ。まるで、何かを自慢する時の子供のよう  
うに。

「まあ、誰？」

「風子の、隣にいる人です」

公子さんは、俺達はしばらく見比べ、

「なんていうか……彼氏というより、お兄ちゃん、って感じね」



「そんなことはありません。どちらかというと、風子の方がしっかりしています。風子の方がお姉ちゃんって感じがします」

「冗談よ。お似合いだわ。二人とも」

公子さんは、幸せそうな笑みを浮かべた。

「公子さんも、ご結婚おめでとうございます」

俺は、軽く頭を下げた。

公子さんは、最近式を挙げたばかりの、つまりは新婚だった。

「ありがとう、嬉しいわ。ゆっくりして行ってね」

俺達は、家の中に入った。

「ここが、風子のお部屋です」

「なんていうか、壮絶だな」

風子の部屋に入った、最初の感想はそれだ。風子の部屋は、ヒトデで埋め尽くされていた。

ベッドのクッションもヒトデ、時計もヒトデ、ヒトデの置物もある。

恐らく、大抵が星を扮した物だろうが、風子からすればヒトデなのだろう。

俺達は、部屋のテーブルに座った。

「それで……これからどうするんですか？」

そう聞いた風子には、気恥ずかしさにも似た同様があった。

「さあな。何をするか」

「もしかして、風子にえつちなことをするつもりですか？ま、待つてください。まだ、風子には心の準備が」

風子は一人で慌てている。その動作が、堪らなく可愛く俺には映る。

「お姉ちゃんがいていました。男の人は、二人きりになると積極的にになると。正直、怖いです。ですが、大人になるには必要なことなので、風子は、甘んじて受け入れましょう」

強い口調で、風子は言い切った。

「いや、しないから、安心しろよ」

「岡崎さんは、とても失礼です。風子に、女性としての魅力がないとでもいうのでしょうか。傲慢じゃありませんが、最近、少しだけ胸が大きくなった気がします。このままいけば、百年後くらいはポインボインです」

風子は胸を張っていった。

いや、萎んでるからな。

「……………今は、一緒にいられるだけでいいんだ。今は」  
俺は心の中から、そう思った。

一緒にいられることに、意味があるんだと。

「……………岡崎さんがそういうなら、しょうがないです」

そういつて、風子は俺に身を寄せてきた。

女の子独特の、良い香りが鼻腔をくすぐる。

俺は、風子を膝の上に乗せた。

「お、岡崎さん」

風子は、声を荒げたが、嫌がっている感じはない。

こうしていると、恋人ではなく、兄妹か、親子に見えるだろう。

だけど、俺達は、本当に付き合っているんだ。

「日曜、何か予定あるか？」

変える間際、俺は風子に尋ねた。

「風子はどうしても忙しいので、何か用があるかもしれません。それがどうかしましたか？」

「どこか行かないか？」

「それはもしかして、デートの誘いでしょうか？」

「まあ、そうなるな」

「風子、急に暇になりました」

「どこか行きたい所はあるか？」

「遊園地がいいです！」

風子は嬉々とした様子で即答。

風子らしい返答に、俺は微笑を浮かべる。

「じゃあ、日曜な」

「はい」

そして、日曜に俺達は遊園地にいた。

「さっきの人、とても失礼です。風子、小学生じゃありません」

入場時に職員に注意されたのが不愉快だったのか、風子は顔を膨らませている。

「気にするな。それより、楽しもうな」

せつかく二人きりできたのだから、楽しまなければ損だ。

「そうですね。あつ、風子、あれに乗りたいです」

「なんだ？」

「メリーゴーランドです」

しばらくの間、俺達は遊園地の遊戯を堪能した。

「風子、あれに乗らないか？」

俺が指を指したのは、施設の中でも、有名な、絶叫マシンだ。

パンフレットの表紙もそれなので、恐らく、ここの売りなのだろう。

真上からは、人々の絶叫が聞こえてくる。

「嫌です。あんなもの、人の乗るものではありません」

「どうしても無理か？」

「………仕方ありません。岡崎さんのわがままに、付き合っ  
てあげましょう」

風子は、俺の執拗な態度に折れ、付き合うことにした。

「………身長制限に引っかかってしまいました。風子、子供  
じゃないです。大人です。あの乗り物は、ひどいです」

風子が身長制限に引っかけり、仕方なく、俺達は戻ってきた。結構待ったのに。

まあ、俺一人で乗るのもあれだしな。

「仕方ない。別の乗り物に乗るか」

「風子、次は観覧車がいいです」

そうして、俺達の時間は過ぎていった。

そして、夜になり、俺達の時間も終わろうとしている。

遊園地も様々なネオンが灯り、昼間とは違った明るさがあった。

「風子、岡崎さんに渡したいものがあります」

「なんだ？」

風子は、背後に隠していたものを、俺に渡した。

それは、木で出来たヒトデだった。

なぜだろうか。

初めて渡されたはずなのに、とても懐かしく思える。

「風子が、作ってきた中でも、最高の出来です。これを、岡崎さんにプレゼントします」

俺は、受け取ったヒトデを感慨深く、見つめていた。

「嬉しくないですか？」

風子は心配そうに訊いてきた。

「いや、嬉しい。嬉しいんだ。どんな高価なものより、俺は嬉しい」

このヒトデには、意味があった。

風子の手は、包帯でぐるぐる巻きになっていた。

これを作る為に、俺の為に。一生懸命、作ってきたんだ。だから、どんな物よりも、俺は嬉しかった。

不覚にも流れそうになる涙を手で拭いた。

「俺も、風子に渡したいものがあるんだ」

俺も、風子に渡そうと用意していたプレゼントを渡す。

風子のプレゼントには及ばないだろうけど。

「わー、ヒトデです。とっても可愛いです」

渡したのは、ヒトデの縫いぐるみだった。渡されたヒトデの縫いぐるみを、風子は胸に当て、抱きしめた。

すると、異世界に飛び立ったように、意識を失った。

ぼわぁ、とした表情のまま、動かなくなる。

なんだか、無性にいたずらしくなってきた。

さて、何をしようか。

俺は、しばらく考えた後、しゃがみ、目線を風子に合わせた。

風子は輝いた目のまま、動かない。

俺は、風子の唇に、唇を重ねる。

しばらくしてから、唇を離れた。

「はっ、風子、もしかして少しだけぼーっとしてましたか？」

意識が戻った風子は、俺にそう尋ねた。

「ああ。してたな」

「・・・もしかして、岡崎さん、風子になにかしましたか？」

唇に、何か感触があります」

「さあな。何かしたかもな」

「岡崎さん、風子に何をしたんですか？教えてください！」

「教えてやるか？」

「はい」

「こうしたんだよ」

俺は、もう一度、風子の唇に唇を重ねる。

「うつつ」

風子は驚いた様子で、目を丸くする。

俺は、唇を離れた。

「つぶは とても苦しかったです」

風子は深呼吸をするかのように、深く息を吸った。

「さてと、そろそろ帰るか」

俺は、そう切り出した。もう、夜も遅い。

「岡崎さん。風子は、岡崎さんのことが好きです」

風子は頬を赤らめ、そういった。

「俺とヒトデ、どっちが好きだ？」

「それは悩めます。どちらかというと、ヒトデかもしれません」

「それは傷つくな・・・」

「冗談です。岡崎さんは、風子のことが好きですか？」

「ああ。好きだ」

「風子、初めて聞きました」

そういえば、俺達は付き合い始めてから、好きだ、の一言もいって  
いなかったな。

「これから、何度でもいうさ」

だって、俺達は、付き合っているのだから。

「俺は風子のが好きだ」

「風子も、岡崎さんのことが大好きです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7845m/>

---

風子アフター

2010年10月28日07時07分発行